

奄美における社会経済調査： 豊かな島嶼の発展を視野に入れて

西村 知¹・河合 溪²

1：鹿児島大学法文学部，2：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

Socio-economic Research in *Amami*: for the Better Future of the Islands

NISHIMURA Satoru¹・KAWAI Kei²

1：Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University

2：Research Center for the Pacific Islands, Kagoshima University

要約

我々は、奄美の社会経済調査の可能性に関する予備調査を実施した。我々の研究目的は、島嶼社会における真の発展を理解するための新しいアプローチを見出すことである。我々は貝類を中心とした環境調査と水質調査を行い、石干見に関して数人の地元の人々に聞き取り調査をおこなった。この予備的研究によって、人と自然のバランスのとれた関係性を研究するためには学際的な研究が重要であることを認識した。本稿では、学際的な研究をより発展させるためには、わかりやすいデータに基づいたアプローチが必要であることを強調した。また、具体的な研究手法として共分散構造分析の利用可能性も提言した。

Abstract

We have conducted a research in *Amami* for three days. Our purpose of research is to come up with new approaches to understand the process which realizes true well-being in islands societies. We carried out shell fish environment survey and water sampling, and we have interviewed several local people regarding *Ishihimi*, or Stone Tidal Weirs. In this preliminary research, we made it sure that interdisciplinary research project is necessarily to analyze the true nature of inter-relationship between human-beings and nature, which enables the well-being of the island people. We also put emphasis on the importance of model building based on clear and understandable data. We suggest that Structural Equation Modeling might be one of the useful tools.

Keywords: Amami, *Ishihimi*, Structural Equation Modeling

1. はじめに

本報告書は、筆者が鹿児島大学学長裁量経費による学内共同研究「豊かな島嶼の発展のために」のためにおこなった研究成果の一部である。2泊3日の短期間ではあるが、豊かな島嶼の発展の実現を視野に入れて、奄美における研究上の貢献の可能性を探るための予備調査をおこなった。今回は、筆者にとって初めて奄美訪問であるということも

あり、主に鹿児島大学国際島嶼教育研究センターの河合溪氏の調査に同行しながら、筆者なりの研究可能性を考察した。具体的には、次の2種類の調査をおこなった。住用地区における貝の分布調査と住用川の水質調査および、笠利町・竜郷町の複数地区における石干見に関するお年寄りへの聞き取り調査である。この短期の予備調査の結果を基にして共同研究プロジェクトへの提言をいくつかおこないたい。

2. 自然資源と文化遺産の管理

島の人々が豊かに誇りを持って生きていくためには、自らの自然資源や文化遺産の管理をおこなうことは非常に重要である。バランスのとれた管理システムによって島の魅力は増幅し、島の外からの観光客や定住者は増加するであろう。今回の調査では、自然資源については自然科学と社会科学の共同研究の可能性、必要性を強く感じた。いうまでもないことであるが、貝類や魚類の生態は、自然条件だけではなく、人間の社会経済活動と密接に関連している。

貝類の生態を専門とする河合氏に同行することによって、住吉地区の貝類の分布調査や住吉川の水質調査おこなったが、この作業によって特定の地区における自然環境と人間の社会経済活動の相互作用をモデル化し、バランスのとれた関係性を描写することに研究の可能性を見出した。筆者は河合氏を研究代表者とする科研費による共同研究の一員としてフィジーにおいて人と自然とのバランスのとれた関係性をモデル化する試みを行っている。この研究と奄美の研究とは研究手法を共有することができる可能性がある。フィジーの研究では、共分散構造分析を行っている。社会経済、自然に関して観測できる変数を数値化し、これらが観測できない変数（潜在変数）とどう関わっているかについて考察している。潜在変数は、村人の資源管理に関するタブーであったり貨幣経済化であったりする。共分散構造分析は、最近では心理学、教育学、経営学、経済学と様々な分野で利用されている。人と自然のバランスのとれた関係を研究するための重要なツールとなりえる。住吉地区が奄美においてこのような調査に適しているかどうかは今回の調査では明らかにできなかったが、ある程度、コミュニティが機能しており、自然資源と住民の生活が強く相互作用している地区が調査地として適しているであろう。自然資源は、貝類や魚類の水産資源であってもいいし、他の自然資源であってもいい。観測変数としては、漁業活動などの経済活動（所得、収入源など）、住民の意識（自然資源に関する）などが考えられる。仮に、奄美のある地区で自然資源と人間の社会経済生活のバランスがとれていることが確認されれば、そのルート、ループは奄美のその地区以外、そして奄美の外でも適用可能性が潜在的にあるのである。

今回の奄美のもう一つの調査テーマである石干見についても様々な観点から豊かな島の発展とこのための研究アプローチを想定することができた。石干見とは、石を積み上げ、潮の干満で石積みの内側に取り残された魚介類を捕る、日本でもかつて用いられていた漁法だ。世界で最古の漁法と言われ、その利用地域は東アジア、東南アジア、南太平洋島嶼国で以前は広く分布していた。地域によってはいまだにこの漁法が用いられている。現在、日本国内では、イベント以外では使われておらず、その多くは海面下で原型を留めていない。今回の調査では、かつて石干見を用いていた地区のお年寄りへの聞き取り調査をおこなった。この聞き取り調査では島の発展という観点からは2点が重要であるということが確認された。まずは、石干見の使用権・利用権である。石干見（積んだ石）の所有権は、個人、コミュニティ、島津藩と様々であったことが確認された。このことは、資源管理の形態には多様性があり、それを規定する要因として政治経済システムが重要であることを示している。奄美の様々な地区における石干見の所有権や運用、相続などを古文書や聞き取り調査で明らかにすることによって現代までの資源管理

の歴史を概観することが可能かもしれない。石干見はこのような歴史的考察という点でも重要であるが、同時代にも直接につながる文化遺産でもある。今回の聞き取り調査によって、石干見による漁業はコミュニティ全体の労働を必要とし、一種のエンターテインメントであったことが確認された。このような祭りの性格は村おこしや地区の再生において活用できる。実際に、国内では大分県の宇佐市や石垣島の白保では石干見の復活の活動が行われている。石干見は人手を加えることによって生物多様性にプラスに働くと主張する論文もある。このような多面的な文化資産は同時に奄美やその他の地域の石干見の研究資源としての重要性を示している。

今回の調査で得た印象は、筆者がこの研究プロジェクトに貢献できる可能性があるとするれば、奄美の有形、無形の文化・自然資源と人々の生活を私の専門の経済学の観点からアプローチすることである。筆者は制度を必ずしも市場の機能という観点からではなく、文化や慣習との関わりから捉え、その進化の過程に注目するホジソンを中心とした現代制度派経済学の研究を行っている。また、ギデンズの再帰的モダニティのテキストに当てはめることも可能である。独自の強い文化、慣習を持った島の生活は中央政府やグローバリゼーションの影響を強く受け再帰的に新しい生活システムが構築されている。このような形で、生活構築のプロセスを前提にした場合、現代制度派経済学のような新しい経済学が必要とされる。また、これらの非常に多様な混性的な（混じりけの多い）生活の規定要因をできるだけ客観的な数字やモデルで描写することが島発の「豊かな生活のシステム」形成ルート・ループを、島を超えて汎用する可能性を広げる。さらに奄美の研究資源を発掘し、それを様々な分野の既存の研究成果を踏まえて発展させることによって研究者による島の豊かな発展への貢献ができるであろう。このことが、地方自治体、中央政府の政策に反映されることも将来的には期待したい。

3. 奄美を起点とした共同研究への提言

最後に全学的な研究プロジェクトへの簡単な提言をおこないたい。この提言は、プロジェクト全体への提言であると同時に私自身の課題でもある。

まずは、島の「豊かさ」をどのように共同研究するかを明確化することが重要である。所得・雇用の安定、自然資源の持続的再生産などの指標が考えられるが、これらをもっと具体化すれば、誰がどのようなことを研究すべきかが明白になるであろう。自然科学と社会科学の研究者が議論することが重要である。その基礎となるのが住民の意識である。聞き取り調査やアンケート調査によって研究者が豊かさという抽象的な概念を具体的なイメージにする必要があるであろう。次に、必要なことは、ある程度、長期でインテンシブな調査をおこなうことである。長期調査（あるいは短期の調査の積み重ねによって独自のデータを収集することが水準の高い研究をもたらすと考えられる。第三に、学内の中小規模の共同研究や個人研究との相互連関が重要であろう。学内の研究資源をいかに全学の研究プロジェクトに活用するかを考える必要があるであろう。最後に、共同研究プロジェクトを通じて学内の研究と教育の連携を充実させることも重要である。教員は長期の滞在調査は困難であるが、大学院生は比較的、容易である。研究手法、実験手法を事前に教育し、彼らにデータ収集を依頼することによって教員の研究、学生の研究能力向上にプラスに働く。

4. 謝辞

野外調査では、奄美マングローブパークの職員の皆様および奄美の一般住民の方へご協力していただいた。ここに感謝いたします。本研究は、鹿児島大学学長裁量経費（拠点形成経費：島嶼プロジェクト-豊かな島嶼の発展のために）によるもので

ある。

5. 参照資料

1. 石垣島白保の石干見（白保魚湧く海協議会）HP
<http://www.sa-bu.com/what/kachi.html>
2. 伊代田光彦他『総合研究所報』桃山学院大学4(2): 13-22.
3. 大分県宇佐市の石干見復活運動HP
http://www.city.usa.oita.jp/cgi-bin/odb-get.exe?WIT_template=AC020000&WIT_oid=icityv2::Contents::1868
4. ギデنزA（1999）『近代とはいかなる時代か？モダニティの帰結』而立書房.
5. 田和正孝（2002）「石干見研究ノート—伝統漁法の比較生態」国立民族学博物館研究報告27(1): 189-229.
6. 田和正孝（2007）『石干見（いしひみ）最古の漁法』法政大学出版局.
7. 原田禎夫, 塩津ゆりか「共分散構造分析をもちいた水資源の共同管理行為の要因分析」大阪商業大学論5(2): 71-81.
8. ホジソンGM（2001）『現代制度派経済学宣言』名古屋大学出版会.
9. 矢野敬生, 中村敬, 山崎正矩榊（2002）「沖縄八重山群島・小浜島の石干見」『早稲田大学人間科学研究』第15(1): 48-83.
10. 柳哲雄「人手と生物多様性」『海の研究』日本海洋学会18(6), 393-398.